

野のはくちょう

DE VILDE SVANER

ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

青空文庫

ここからは、はるかな国、冬がくるとつばめがとんで行くとおい国に、ひとりの王さまがありました。王さまには十一人のむすこと、エリーザというむすめがありました。十一人の男のきょうだいたちは、みんな王子で、胸に星のしるしをつけ、腰に剣をつるして、学校にかよいました。金のせきばんの上に、ダイヤモンドの石筆せきひつで字をかいて、本でよんだことは、そばからあんしよしました。

この男の子たちが王子だということは、たれにもすぐわかりました。いもうとのエリーザは、鏡ガラスのちいさな腰掛に腰をかけて、ねだんにしたらこの王国の半分ぐらいもねうちのある絵本をみていました。

ああ、このこどもたちはまつたくしあわせでした。でもものごとはいつでもおなじようにはいかないものです。

この国のこらずの王さまであつたおとうさまは、わるいお妃おとよめと結婚けっこんなさいました。このお妃がまるでこどもたちをかわいがらないことは、もうはじめてあつたその日からわかりました。ご殿じゆうごぞつて、たいそうなお祝の宴会がありました。こどもたちは「お客さまごっこ」をしてあそんでいました。でも、いつもしていたように、こどもたちはお菓

子や焼きりんごをたくさんいただくことができませんでした。そのかわりにお茶わんのなかに砂を入れて、それをごちそうにしておあそびといいつけられました。

その次の週には、お妃はちいぢやないもうと姫のエリーザを、いなかへ連れていって、お百姓の夫婦にあずけました。そうしてまもなくお妃はかえって来て、こんどは王子たちのことであるいろいろなことを、王さまにいつけました。王さまも、それでもう王子たちをおかまいにならなくなりました。

「どこの世界へでもとんでいって、おまえたち、じぶんでたべていくがいい。」と、わるいお妃はいいました。「声のでない大きな鳥にでもなって、とんでいっておしまい。」

でも、さすがにお妃ののろったほどのひどいことにも、なりませんでした。王子たちは十一羽のみごとな野の白鳥はくちょうになったのです。きみようななき声をたてて、このはくちょうたちは、ご殿の窓をぬけて、おにわを越して、森を越して、とんでいってしまいました。

さて、夜のすっかり明けきらないうち、はくちょうたちは、妹のエリーザが、百姓家のへやのなかで眠っているところへ来ました。ここまで来て、はくちょうたちは屋根の上をとびまわって、ながい首をまげて、羽根をばたばたやりました。でも、たれもその声をき



いたものもなければ、その姿をみたものもありませんでした。はくちょうたちは、しかたがないので、また、どこまでもとんでいきました。上へ上へと、雲のなかまでとんでいきました。とおくとおく、ひろい世界のはてまでもとんでいきました。やがて、海ばたまでずっとつづいている大きなくらい森のなかまでも、はいつていきました。

かわいそうに、ちいさいエリーザは百姓家のひと間にまぼつねんとひとりできて、ほかになにもおもちゃにするものがありませんでしたから、一枚の青い葉っぱをおもちゃにしていきました。そして、葉のなかに孔をあなぽつんとあけて、その孔からお日さまをのぞきました。それはおにいさまたちのすんだきれいな目をみるような気がしました。あたたかいお日さまがほおにあたるたんびに、おにいさまたちがこれまでにしてくれた、のこらずのせつぷんをおもい出しました。

きょうもきのうのように、毎日、毎日、すぎていきました。家のぐるりのいけ垣を吹いて、風がとおつていくとき、風はそつとぼらにむかつてささやきました。

「おまえさんたちよりも、もつときれいなものがあるかしら。」
けれどもぼらは首をふって、

「エリーザがいますよ。」とこたえました。

それからこのうちのおばあさんは、日曜日にはエリーザのへやの戸口に立って、さんび歌の本を読みました。そのとき、風は本のページをめくりながら、本にむかって、

「おまえさんたちよりも、もつと信心ぶかいものがあるかしら。」といいました。するとさんび歌の本が、

「エリーザがいますよ。」とこたえました。そうしてばらの花やさんび歌の本のいったことはほんとうのことでした。

このむすめが十五になったとき、またご殿にかえることになっていました。けれどお妃はエリーザのほんとうにうつくしい姿をみると、もうねたましくも、にくらしくもなりませんでした。いつそおにいさんたち同様、野のはくちようにかえてしまいたいとおもいました。けれども王さまが王女にあいたいというものですから、さすがにすぐとはそれをするのもできずにいました。

朝早く、お妃はきらいせお湯にはいりにいきます。お湯殿は大理石でできていて、やわらかなしとねと、それこそ目がさめるようにりっぱな敷物がそなえてありました。そのとき、お妃はどこからか三びき、ひきがえるをつかまえてきて、それをだいて、ほおずりしてやりながら、まずはじめのひきがえるにこういいました。

「エリーザがお湯にはいりに来たら、あたまの上のつておやり。そうすると、あの子はおまえのようなばかになるだろうよ——。」

それから二ひきめのひきがえるにむかつて、こういいました。

「あの子のひたいのつておやり、そうするとあの子は、おまえのようなみつともない顔になって、もう、おとうさまにだつて見分けがつかなくなるだろうよ——。」

それから、三ひきめのひきがえるにささやきました。

「あの子の胸の上のつておやり。そうすると、あの子にわるい性根しょうねがうつつて、そのためくるしいめにあうだろうよ。」

こういって、お妃は、三ひきのひきがえるを、きれいなお湯のなかにはなしますと、お湯は、たちまち、どろんとしたみどり色にかわりました。そこでエリーザをよんで、着物をぬがせて、お湯のなかにはいらせました。エリーザがお湯につかりますと、一ぴきのひきがえるは髪の上のりしました。二ひきめのひきがえるはひたいの上のりしました。三ひきめのひきがえるは胸の上のりしました。けれどもエリーザはそれに気がつかないようでした。やがて、エリーザがお湯から上がると、すぐあとにまっかなけしの花が三りん、ぽっかり水の上に浮いていました。このひきがえるどもが、毒虫でなかつたなら、そうして

あの魔女の妃がほおずりしておかなかつたら、それは赤いばらの花にかわるところでした。でも、毒があつても、ほおずりしておいても、とにかくひきがえるが花になったのは、むすめのあたまやひたいや胸の上のつたおかけでした。このむすめはあんまり心がよすぎで、罪がなさすぎて、とても魔法の力にはおよばなかつたのです。

どこまでもいじのわるいお妃は、それをみると、こんどはエリーザのからだをくるみの汁でこすりました。それはこの王女を土色によごすためでした。そうして顔にいやなおいのする油をぬつて、うつくしい髪の毛も、もじやもじやにふりみださせました。これでもう、あのかわいらしいエリーザのおもかげは、どこにもみられなくなりました。

ですから、おとうさまは王女をみると、すっかりおどろいてしまいました。そうして、こんなものはむすめではないといいました。もうたれも見分けるものはありません。知っているのは、裏庭にねている犬と、のきのつばめだけでしたが、これはなんにもものいえない、かわいそうな鳥けものどもでした。

そのとき、かわいそうなエリーザは、泣きながら、のこらずいなくなつてしまつたおにいさまたちのことをかんがえだしました。みるもいたいたしいようすで、エリーザは、お

城から、そつとぬげだしました。野といわず、沢といわず、まる一日あるきつづけて、とうとう、大きな森にでました。じぶんでもどこへ行くつもりなのかわかりません。ただもうがっかりしてつかれきつて、おにいさまたちのゆくえを知りたいとばかりおもっていました。きつとおにいさまたちも、じぶんと同様に、どこかの世界にほうりだされてしまったのだらう、どうかしてゆくえをさがして、めぐり逢いたいものだとおもいました。

ほんのしばらくいるうちに、森のなかはもうとつぷり暮れて、夜になりました。まるで道がわからなくなってしまったので、エリーザはやわらかな苔こけの上になんて横になって、晩のお祈をとえながら、一本の木の株にあたまを寄せかけました。あたりはしんとしずまりかえって、おだやかな空気につつまれていました。草のなかにも草の上にも、なん百とないほたるが、みどり色の火にた光をぴかぴかさせていました。ちよいとかるく一本の枝に手をさわっても、この夜ひかる虫は、ながれ星のようにばらばらと落ちて来しました。

ひと晩じゆう、エリーザは、おにいさまたちのことを夢にみました。みんなはまだむかしのとおりのごども同士で、金のせきばんの上にダイヤモンドの石筆で字をかいたり、王国の半分もねうちのあるりっぱな絵本をみたりしていました。でも、せきばんの上にかいているものは、いつもの零れいや線ではありません。みんながしてきた、りっぱな行いや、み

んながみたりおぼえたりしたいろいろのことでした。それから、絵本のなかのものは、なにかも生きていて、小鳥たちは歌をうたうし、いろんな人が本からぬけてでて来て、エリーザやおにいさまたちと話をしました。でもページをめくるとぬけだしたものは、すぐまたもとへとんでかえっていきますから、こんぎつしてさわぐというようなことはありませんでした。

エリーザが目をさましたとき、お日さまは、もうとうに高い空にのぼっていました。でも高い木立が、あたまの上で枝をいっぱいひろげていましたから、それを見ることができませんでした。ただ光が金の紗きんしゃのきれを織るように、上からちらちら落ちて来て、若いみどりの草のにおいがぶんとかおりました。小鳥たちは肩のうえにすれすれにとまるようにしました。水のしやあしやあながれる音もきこえました。これはこのへんにたくさんの泉があつて、みんな底にきれいな砂のみえているみずうみのなかへながれこんでいくのです。みずうみはふかいやぶにかこまれていましたが、そのうち一箇所いっしよに、しかが大きなではいいり口をこしらえました。エリーザはそこからぬけて、みずうみのふちまでいきました。みずうみはほんとうにあかるくきれいにすみきつていて、風がやぶや木の枝をふいてうごかさなければ、そこにうつる影は、まるで、みずうみの底にかいてある絵のようにみえまし

た。

そこには一枚一枚の葉が、それはお日さまが上から照っているときでも、かげになつているときでも、おなじようにはつきりとうつつて、すんでみえました。

エリーザは水に顔をうつしてみて、びつくりしました。それは土色をしたみにくい顔でした。でも水で手をぬらして、目やひたいをこすりますと、まっ白なはだがまたかがやきだしました。そこで着物をぬいで、きれいな水のなかにはいつていききました。もうこのむすめよりうつくしい王さまのむすめは、この世界にふたりとはありませんでした。それから、また着物を着て、ながい髪の毛をもとのように編んでから、こんどはそこにふきだしている泉のところへいつて、手のひらに水をうけてのみました。それからまた、どこへいくというあてもなしに、森のなかをさらに奥ぶかく、さまよいあるきました。エリーザはなつかしいおにいさまたちのことをかんがえました。けっしておみすてにならない神さまのことをおもいました。ほんとうに神さまは、そこへ野生のりんごの木をならせて、空腹をしのがせてくださいました。神さまはエリーザに、なかでもいっぱいなつたりんごの実のおもみで、しなっている木をおみせになりました。そこでエリーザはたっぷりおひるをすませて、りんごのしなつた枝につつかい棒をかつてやりました。それからまた、森のい

ちばん暗い奥の奥にはいつていきました。それはじつにしずかで、あるいて行くじぶんの足音もきこえるくらいでしたし、足の下で枯れツ葉のかさこそくずれる音もきこえました。一羽の鳥の姿もみえませんでした。ひとすじの日の光も暗い木立のなかからさしこんでは来ませんでした。高い樹の幹が押しあつてならんでいて、まえをみると、まるで垣根がいくえにも結ばれているような気がしました。ああ、これこそうまれてまだ知らなかったさびしさでした。

すっかりくらい夜になりました。もう一ぴきのほたるも草のなかに光つてはいませんでした。わびしいおもいでエリーザは横になって眠りました。すると、木木の枝があたまの上で分かれて、そのあいだから、やさしい神さまの目が、空のうえからみておいでになるようにおもいました。そうして、そのおつむりのへんに、またはお腕のあいだから、かわいらしい天使のぞいているようにおもわれました。

朝になつても、ほんとうに朝になったのか、夢をみているのか、わかりませんでした。エリーザはふた足三足いきますと、むこうからひとりのおばあさんが、かごのなかに木いちごを入れてもつてくるのであいました。

おばあさんは木いちごをふたつ三つだしてくれました。エリーザはおばあさんに、十一

人の王子が馬にのつて、森のなかを通つていかなかつたかとたずねました。

「いいえ。」と、おばあさんがこたえました。「だが、きのう、あたしは十一羽のはくちょうが、めいめいあたまに金のかんむりをのせて、すぐそばの川でおよいでいるところをみましたよ。」

そこで、おばあさんはエリーザをつれて、すこしさきの坂になったところまで案内しました。その坂の下にちいさな川がうねつてながれていました。その川のふちには、木立こだちが長い葉のしげつた枝と枝とおたがいにかわしていました。しぜんのままにのびただけでは、葉がまざり合うまでになれないところには、木の根が、地のなかから裂けてでて、枝とをからまり合いながら、水の上にたれていました。

エリーザはおばあさんに「さようなら」をいうと、ながれについて、この川口が広い海へながれ出している所まで下つていきました。

大きなすばらしい海が、むすめの目のまえにあらわれました。けれどひとつの帆もそのおもてにみえてはいませんでした。いつそうの小舟もそのうえにうかんではいませんでした。どうしてそれからさきへすすみましよう。王女は、浜のうえに、数しらずころがつている小石をながめました。水がその小石をどれもまるくすりへらしていました。ガラスで

も、鉄くずでも、石でも、そこらにあるものは、王女のやわらかな手よりももつとやわらかな水のために、かたちをかえられていました。

「波はあきずに巻きかえっている。それで堅いものでもいつかすべっこくなる。わたしもそのとおりあきずにいつまでもやりましょう。あとからあとからきれいに寄せてくる波よ。おまえにいいことを教えてもらってよ。なんだかいつか、おまえたちのおかげでおにいさまたちのところへつれて行ってもらえるような気がするわ。」

うちよせられた海草の上に、白いはくちょうの羽根が十一枚のこつていました。それをエリーザは花たばにしてあつめました。その羽根の上には、水のしづくがたれていました。それは露の玉か、涙のしづくかわかりません。浜の上はいかにもさびしいものでした。けれど大海のけしきが、いつときもおなじようでなく、しじゅうそれからそれとかわるので、さほどさびしいともかんじませんでした。それは二三時間のあいだに、おだやかな陸にかこまれた内海が一年かかつてするよりも、もつとたくさんの変化をみせました。するうち、まつくろな大きな雲がでて来ました。海も「おれだつてむずかしい顔をするぞ。」というようにおもわれました。やがて風が吹きだして、波が白い横腹をうえに向けました。でも雲がまつ赤にかがやきだして、風がびつたりとまると、海はばらの花びらのようにみえま

した。それからまた青くなったり白くなったりしました。でもいかほど海がおだやかないでも、やはり浜辺にはいつもさざなみがゆれていました。海の水はねむっているこどもの胸のように、やさしくふくれあがりました。

お日さまがちょうどしずもうとしたとき、十一羽の野のはくちょうが、めいめいあたまに金のかんむりをのせて、おかのほうへとんでくるところをエリーザはみました。一羽また一羽と、あとからあとから行儀よくつづいてくるのでそれはただひとすじながくしろい帯をひいてとるようにみえました。そのときエリーザは坂にあがって、そつとやぶかげにかくれました。はくちょうたちは、すぐそのそばへおりて来て、大きな白いつばさをばたばたやりました。いよいよお日さまが海のなかにしずんでしまうと、とたんに、はくちょうの羽根がぱつたりおちて、十一人のりっぱな王子たちが、エリーザのおにいさまたちが、そこに立ちました。エリーザはおもわず、あつと大きなさけび声をたてました。それはおにいさまたちはずいぶん、せんとかわっていました。けれど、やはりそれにちがいないことが、すぐとわかったからでした。そこでみんなの腕のなかにとびこんでいって、ひとりひとり、名まえをよびました。王子たちは、そうして王女がまたでて来たのを見て、それはもうせいも高くなり、きりようもずつとうつくしくなつてはいましたけれど、じぶんた

ちのいもうとということがわかって、いいようもなくうれしくおもいました。みんなは泣いたりわらったりしました、そうして、こんどのおかあさまが、きょうだいのこらずに、どんなにひどいことをしたか、おたがいの話でやがてわかりました。

「ぼくたちきょうだいはね、」と、いちばん上のおにいさまがいました。「みんな、お日さまが空にでているあいだ、はくちようになつてとびまわるが、お日さまがしずむといつしよに、また人間のかたちにかえるのだよ。だから、しじゅう気をつけて、お日さまがしずむころまでには、どこかに、かならず足を休める場所をみつけておかなければならないのさ。それをしないで、うかうか雲のほうへとんで行けば、たちまち人間とかわって、海の底へしずまなければならぬのだよ。わたしたちはここに住んでいるのではない。海のむこうに、ここと同様、きれいな国がある。でもそこまでいく道はとても長くて、ひろい海のうえをわたっていかなければならない。その途中には夜をあかす島もない。ただちいさな岩がひとつ海のなかにつきでているだけだ。でもどうやら、そこにはみんながくつき合つてすわるだけのひろさはある。海が荒れているときには、波がかぶさってくるが、それでも、その岩のあるのがどのくらいありがたいかしのれない。そこでぼくたち、夜だけ、人間のかたちになつて明かすのだからね。まったくこの岩でもなかつたら、ぼくたちは、

好きなふるさとへかえることができないだろう。なにしろ、そこまでいくのは一年のなかでもいちばん長い日を、二日分とばなければならぬのだからね。一年にたったいっぺん、ふるさとの国をたずねることがゆるされている。そうして、十一日のあいだここにとどまっただけで、この大きな森のうえをとびまわる。まあ、この森のうえから、ぼくたちのうまれたおとうさまの御殿もみえるし、おかあさまのうめられていらっしやるお寺の塔もみえるというわけさ。——だからこのあたりのものは、やぶでも木立こたちでも、ぼくたちの親類のようにおもわれる。ここでは野馬がこどものじぶんみたとおり草原をはしりまわっている。炭焼までが、ぼくたちがむかし、そのふしにあわせておどったとおりの歌をいまでもうたう。ここにぼくたちのうまれた国があるのだ。どうしてもここへぼくたちは心がひかれるのだ。そうしてここへ来たおかげで、とうとう、かわいいもうとのおまえをみつけたのだ。もう二日、ぼくたちはここにいらることができぬ。それからまた海をわたってむこうのうつくしい国へいかなければならぬ。けれどもそこはぼくたちのうまれた国ではないのだ。でもどうしたらおまえをつれていけようね。ぼくたちには船もないし、ボートもないのだからね。」

「どうしたらわたしは、おにいさんたちをたすけて、もとの姿にかえして上げることがで



きるでしようね。」と、いもうともいいました。こうしてきようだいは、ひと晩じゆう話をして、ほんの二、三時間うとうとしただけでした。

エリーザはふと、あたまの上ではくちようの翼がばさばさ鳴る音で目がさめました。きようだいたちはまた姿を変えられていました。やがてみんなは大きな輪をつくつてとんでいきました。けれどもそのなかでひとり、いちばん年下のおにいさまだけが、あとにのこっていました。そのはくちようは、あたまを、いもうとのひぎのうえにのせていました。こうして、まる一日、ふたりはいつしよになつていました。夕方になると、ほかのおにいさまたちがかえつて来ました。やがて、お日さまがしずむと、みんなまたあたりまえのすがたにかえりました。

「あしたはここからとんでいつて、こんどはまる一年たつまでかえつてくることはできない。でもおまえをこのままここへおくことはどうしたつてできない。おまえ、わたしたちといっしよに行く勇氣があるかい。わたしたち、腕一本でも、おまえをかかえて、この森を越すだけの力はある。だからみんなのつばさを合わせたら、海のうえをはこんでわたれないことはなからう。」

「ええ、ぜひつれていつてください。」と、エリーザはいいました。

そこでひと晩じゆうかかって、みんなしてよくしなうかわやなぎの木の皮と、強いあしとで網を織りました。それは大きくて丈夫にできました。この網のうえにエリーザは横になりました。やがてお日さまがのぼると、おにいさまたちははくちようのすがたに変わって、てんでんくちばしで網のさきをくわえました。そうして、まだすやすやねむっている、かわいいもうとをのせたまま、雲のうえたかくとんでいきました。ちようどお日さまの光が顔にあたるものですから、一羽のはくちようは、いもうとのあたまのうえでとんでやって、その大きなつばさでかげをこしらえてやりました。――

やがてエリーザが目をさましたじぶんには、もうずいぶんとおくへ来ていました。エリーザはまるで夢をみているような気持ちでした。空を通って、海を越えて、高くはこばれて行くということが、どんなにふしぎにおもわれたことでしょう。すぐそばには、おいしうにじゆくしたいちごの実をつけたひと枝と、いかおりのする木の根がひと束たばおいてありました。それらはあのいちばん年の若いおにいさまが、取って来てくれたものでした。いもうとはそのおにいさまのはくちようをみつけて、下からにっこり、うれしそうにわらいかけました。あたまの上をとんで、つばさでかげをつくっていてくれるのも、このおにいさまでした。

もうすいぶん高くとんで、はじめ下でみつけた大きな船は、いつか白いかもめのように、ぼつり水のうえに浮いていました。ひとかたまりの大きな雲が、すぐうしろにぬつとあらわれましたが、それはどこからみても、ほんとうの山でした。その雲の山に、エリーザはじぶんの影や十一羽のはくちょうの影がうつるのをみました。みんな、それこそ見上げるような大きな鳥になってとんでいました。まったくみたこともないすばらしい影でした。でもお日さまがずんずん高くのぼって、雲がずつとうしろに取りのこされると、その影のようにうかんでいる絵が消えてなくなりました。

まる一日、はくちょうたちは、空のなかを、かぶら矢のようにうなつてとびつづけました。

でもなにしろ、いもうとひとりつれていのですから、おくれがちで、いつものようにはとべません。するうち、いやなお天気になって来て、夕暮もせまって来ました。エリーザはしずみかけているお日さまをながめて、まだ海のなかにさびしく立っている岩というのが目にはいらぬいものですから、心配そうな顔をしていました。はくちょうたちがよけいはいげしく羽ばたきしはじめたようにおもわれました。ああ、おにいさまたちみんなが、おもいきって早くとぶこともできないのは、エリーザのためだったのです。やがてお日さ

まがしずむと、みんなは人間にかえつて滝のなかに落ちておぼれなければなりません。そのとき、エリーザはこころの底から、お祈りのことばをとなえました。でもまだ岩はみつかりません。まっくろな雲がむくむく近よつて来ました。やがてそれは大きなきみわるく黒い雲の山になつて、まるで、鉛のかたまりがころがってくるようでした。ぴかりぴかり稲^{いな}妻^{なづま}が、しきりなしに光りだして来ました。

いよいよお日さまが海のきわまで落ちかけて来ました。エリーザの胸は、わなわなふるえました。そのときはくちようたちは、まっしぐらに、まるで、さかさになつて落ちくだるいきおいでおりて行きました。はつとおもうとたん、またふと浮きあがりました。お日さまは、半分もう水の下にかくれました。でも、そのときはじめて目の下に小さい岩をみつけました。それはあざらしというけものはこんなものかとおもわれるほどの大ききで、水のうえにちよっぴり顔をだしていました。お日さまはみるみる沈んでいきました。とうとうそれがほんの星ぐらいにちいさくみえたとき、エリーザの足はしつかりと大地につきました。

お日さまは紙きれが燃えきれて、さいごにのこつた火花のようにみえてふと消えてしまいました。おにいさまたちは、手をとりあつてエリーザのまわりに立っていました。でも、

それだけしか場所はなかったのです。波はたえず岩にぶつかって、しぶきのようにエリーザのあたまにふりそそぎました。空はしつきりなしにあかあかともえる火で光って、ごろごろ、ごろごろ、たえず音がして、かみなりはなりつづきました。でも、きょうだいおたがいにしつかりと手をとりあつて、さんび歌をうたいますと、それがなぐさめにもなり、げんきもついて来ました。

明け方のうすあかりで見ると、空気はすみきつて風もおだやかでした。お日さまがのぼるとすぐ、はくちょうたちはエリーザをつれて、この島をぱつとび立ちました。海はただすごい波が立っていました。やがて高く舞り上がって、下をみると、紺こんじょう青の海のように立つ白いあわは、なん百万と知れないはくちょうが、水のうえでおよいでいるようでした。

お日さまがいよいよ高く高くのぼったとき、エリーザは目のまえに、山ばかりの国が半分空のうえに浮いているのをみつけました。その山のいただきには、まつしろに光る氷のかたまりがそびえ、そのまんやかに、なんマイルもあろうとおもわれるお城が立っていて、そのまわりにきらびやかな柱がいくつもいくつもならんでいました。エリーザはこれがみ

んなのいこうとする国なのかとたずねました。けれどはくちょうたちは首をふりました。なぜというにエリーザの今みたのは、しんきろうと行ってりっぱに見えても、それはたえずかわっている雲のお城で、人のいけるところではなかったのです。なるほどエリーザがみつめているうちに、山も林もお城もくずれてしまつて、そのかわりに、こんどは、どれもおなじようなりっぱなお寺が、二十も高い塔やとがった窓をならべていました。なんだかそこからオルガンがひびいてくるような気がしましたが、でもそれは海鳴りの音をききちがえたものでした。やがてお寺のすぐそばまでいきますと、みるみるそれは艦隊になつて、海をわたつていききました。でもよくながめると、それもただ海の上を霧がはつていただけでした。そんなふうには、しじゅう目のまえにかわつたまぼろしを見ながらとんでいくうちに、とうとう目ざすほんものの国をみつめました。そこには、うつくしい青い山がそびえて、すぎ林が茂つて、町もあり、お城もありました。お日さまがまだ高いうちに、大きなほら穴のまえの岩のうえにおりました。そこにはやわらかなみどり色のつる草が、縫いとりした壁かけのようにうつくしくからんでいました。

「さあ、ここで、今夜はおまえもどんな夢をみるだろうね。」と、末のおにいさまがいつて、いもうとのねべやをみせてくれました。

「どうか、神さまが夢で、どうしたらおにいさまたちをすくつて、もとの姿にかえしてあげられるかおしえてくださるといいのですわ——。」と、いもうとはこたえました。

このかんがえが、しつきりなし、エリーザの心にはたらいていました。それでエリーザは神さまのお助けを熱心にいのりました。それはねむっているあいだもいのりつづけました。するうち、エリーザはたかく空のうえに舞い上がって、しんきろうの雲のお城までもとんでいったようにおもいました。すると、うつくしいかがやくような妖女ようじよがひとり、おむかえにでて来ました。ところでその妖女が、あの森のなかでいちごの実をくれて、金のかんむりをあたまにのせたはくちようの話をしてくれたおばあさんによくにっていました。「おにいさまたちは、もとの姿にもどれるだろうよ。」と、その妖女ようじよはいいました。

「でも、おまえさんにそこまでの勇氣と辛抱があるかい。ほんとうに、水はおまえのきやしやな手よりもやわらかだ。けれどもあのとおり石のかたちを変える。でもそれをするには、おまえさんの指がかんじるような痛みをかんじるわけではない。あれには心がない。おまえさんがこらえなければならぬような苦しみをうけることもない。だからおまえさん、そら、あたしが手に持っているイラクサをごらん。こういう草はおまえさんが眠っているほら穴のぐるりにもたくさん生えているのだよ。その草と、お寺の墓地に生えている

イラクサだけがいまおまえさんの役に立つのだからね。それは、おまえさんの手をひどく刺して、火ぶくれにするほど痛かろうけれど、がまんして摘みとらなければならぬだよ。そのイラクサをおまえさんの足で踏みちぎって、それを麻のかわりにして、それでおまえさんは長いそでのついたくさりかたびらを十一枚編まなければならぬ。そうしてそれを十一羽のはくちように投げかければ、それで魔法はやぶれるのだよ。でもよくおぼえておいでなさい。おまえさんがそのしごとをはじめたときから、それができ上がるまで、それはなん年かかろうとも、そのあいだ、ちつとも口をきいてはならないのですよ。おまえきの口から出たはじめてのことばが、もうすぐおにいさまたちの胸を短刀のかわりにさすだろう。あの人たちのいのちは、おまえさんの舌しだいなのだ。それをみんなしつかりと心にとめておぼえておいでなさいよ。」

こういって、妖ようじよ女はエリーザの手をイラクサでさわりました。それはもえる火のようにあつかつたので、エリーザはびくりとして目がさめました。すると、もう、そとはかんあかるいまひるでした。ねむっていたすぐそばに、夢のなかでみたとおなじようなイラクサが生えていました。エリーザはひざをついて、神さまにお礼のお祈をしました。それからほら穴をでて、しごとにかかりました。

エリーザはきやしやな手で、いやらしいイラクサのなかをさぐりました。草は火のようにあつく、エリーザの腕をも手首をも、やけどするほどひどく刺しました。けれどもそれでおにいさまたちをすくうことができるなら、よろこんで痛みをこらえようとおもいました。それからつみ取ったイラクサをはだしてふみちぎって、みどり色の麻をそれから取りました。

お日さまがしずむと、おにいさまたちはかえって来ました。いもうとがおしになったのを見て、みんなびつくりしました。これもわるいまま母がかわった魔法をかけたのだろうとおもいました。でも、いもうとの手をみて、じぶんたちのためにしてくれているのだとわかると、末のおにいさまは泣きました。このおにいさまの涙のしずくが落ちると、もう痛みがなくなつて、手の上のやけどのあとも消えてしまいました。

エリーザは夜もせつせと仕事にかかっていました。もうおにいさまたちをすくいだすまでは、いつときもおちつけないのです。そのあくる日も一日、はくちょうたちがよそへとんで行っているあいだ、エリーザはひとりぼっちのこつていました。けれどこのごろのよるに時間の早くたつことはありません。もうくさりかたびらは一枚でき上がりしました。こんどは二枚目にかかるどころです。

そのとき獵りようのつの笛が山のなかできこえました。エリーザはおびえてしまいました。そのうちつの笛の音はずんずん近くなつて。獵犬のほえる声もきこえました。エリーザはどおどしながら、ほら穴のなかになげこんで、あつめてとつておいたイラクサをひと束にたばねて、その上に腰をかけていました。

まもなく、大きな犬が一ぴき、やぶのなかからとび出して来ました。それから二ひき、三ぴきとつづいてとび出して来て、やかましくほえたてました。いったんかけもどつてはまたかけ出して来ました。そのすぐあとから、獵のしたくをした武士たちが、のこらずほら穴のまえにいならびました。そのなかでいちばんりっぱなようすをした人が、この国の王さまでした。王さまはエリーザのほうへつかつかとすすんで来ました。王さまはうまれてまだ、こんなうつくしいむすめをみたことがなかったのです。

「かわいらしい子だね。どうしてこんなところへ来ているの。」と、王さまはおたずねになりました。

エリーザは首をふりました。口をきいてはたいへんです。おにいさまたちがすぐわれなくなつて、おまけにいのちをうしなわなければなりません。そうして、エリーザは両手を前掛の下にかくしました。痛めている手を王さまにみられまいとしたのです。

「わたしといっしょにおいで。」と、王さまはいいました。「おまえはこんなところにいる人ではない。おまえの顔がうつくしいように、心もやさしいむすめだったら、わたしはおまえにびろうどと絹の着物をきせて、金のかんむりをあたまにのせてあげよう。そうして、おまえは世にもりっぱなわたしのお城に住んで、この国の女王になるのだよ。」

こういって、王さまはエリーザを、じぶんの馬のうえにのせました。エリーザは泣いて両手をもみました。けれども王さまはこうおっしゃるだけでした。

「わたしは、ただおまえの幸福をのぞんでいるだけだ。いつかおまえはわたしに礼をいうようになろう。」

それで、じぶんのまえにエリーザをのせたまま、王さまは山のなかを馬でかけていきました。武士たちも、すぐそのあとにつづいてかけていきました。

お日さまがしずんだとき、うつくしい王さまの都が目のおまえにあらわれました。お寺や塔がたくさんそこになりました。やがて、王さまはエリーザをつれてお城にかえりました。

その高い大理石の大広間には、大きな噴水がふきだしていました。壁と天てんじょう井には目のさめるような絵がかざってありました。けれども、エリーザにそんなものは目には



いませんでした。ただ泣いて、泣いて、せつながってばかりいました。そうしてただ、召使の女たちにされるままに、お妃さまの着る服を着せられ、髪に真珠しんじゆの飾をつけて、やけどだらけの指に絹の手袋をはめました。

エリーザがすっかりつばにしたいくができて、そこにあらわれますと、それは目のくらむようなうつくしさでしたから、お城の役人たちは、ひとしおていねいにあたまをさげました。そこで王さまは、エリーザをお妃きさきに立てようと思いました、そのなかでひとり、この国の坊さまたちのかしらの大僧正だいそうじょうが首をふって、このきれいな森のむすめはきつと魔女で、王さまの目をくらし、心を迷わせているにちがいないとささやきました。

けれども王さまはそのことばには耳をかしませんでした。もうすぐにおいおいの音楽をはじめよとおいつけになりました。第一等のりっぱなお料理をこしらえさせて、よりぬきのきれいなむすめたちに踊らせました。そうして、エリーザは、香りの高い花園をぬけて、きらびやかな広間に案内されました。けれどもそのくちびるにも、その目にも、ほほえみのかげもありませんでした。ただそこには、まるでかなしみの涙ばかりが、世世にうけついで来たままこりかたまって、いつまでもながくはなれないとでもいうようでした。そのとき王さまは、エリーザを休ませるためことに用意させた、そばのちいさいへやの戸

を開きました。このへやは、高価なみどり色のかべかけでかぎってあって、しかも今までエリーザのいたほら穴とそっくりおなじような作りでした。ゆかの上にはイラクサから紡つむい麻束あきたばがおいてありました。天てんじょう井いにはしあげのすんだくさりかたびらがぶらさがつていました。これはみんな、武士のひとりか、めずらしがって持ちはこんで来たものでした。

「さあ、これでおまえはもとのすまいにかえった夢でもみるがいい。」と、王さまはおつしやいました。「ほら、これがおまえのしかけていたしごとだ。そこでいま、このうつくしいりつばなものづくめのなかにおいて、むかしのことをかんがえるのもたのしみであろう。」

エリーザはしじゆう心にかかっている、この品じなをみますと、ついほほえみがくちびるにのぼって来て、赤い血がぼおつとほおを染めました。エリーザはおにいさまたちをすくうことを心におもいながら、王さまの手にくちびるをつけました。王さまはエリーザを胸にだき寄せました。そうして、のこらずのお寺の鐘をならさせて、ご婚礼のお祝のあることを知らせました。森から来たおしのむすめは、こうしてこの国の女王になりました。

そのとき大僧正だいそうじょうは、王さまに不吉ふきつなことをささやきました。けれどもそれは王さま

まの心の中へまでははいりませんでした。結婚の式はぶじにあげられることになりました。しかも大僧正みずからの手で金のかんむりをお妃おききのあたまにのせなければなりませんでした。いじのわるい、にくみの心で、大僧正はわざとあたまに合わないちいさな輪をむりにはめ込んだので、お妃はひたいがいたんでなりませんでした。でも、それよりもつともたい輪がお妃の心にくびり込んでなれません。それはおにいさまたちをいたましくおもう心でした。それにくらべては、からだの痛みなどはまるでかんじないくらいでした。ただひと言、ことばを口にだしても、おにいさまたちの命にかかわることでしたから、くちびるはかたくむすんで、あくまでおしをつづけました。でもその目は、やさしい、りっぱな王さまをこのましくおもっていました。王さまはエリーザのためには、どんなことでもなさいました。それでエリーザも、一日、一日と、日がたつにしたがつて、ありつたけの心をかたむけて、王さまをだいじにするようになりました。ああ、それを口にだして王さまにうちあけることができたなら、そして心のかなしみをかたることができたら、どんなにうれしいことでしょう。けれどいまは、どこまでもおしでいなければなりません。おしのままできて、しごとをしあげなければなりません。ですから、夜になると、王さまのおそばからそつとぬけ出して、あのほら穴のようにかざりつけた小べやにはいつて、く

さりかたびらを、一枚一枚編みました。けれどいよいよ七枚めにかかったとき、麻糸がつきてしまいました。

エリーザは、お寺の墓地へいけば、イラクサの生はえていることを知っていました。けれどそれには、じぶんでいってつんでこなければならないのです。どうしてそこまでできましよう。

「ああ、わたしの心にいだく苦しみにくらべては、指の痛みぐらいなんだろう。」と、エリーザはおもいました。「わたしはどうしたってそれをしなければならぬ。そうすれば神さまのおたすけがきつとあるにちがいない。」

それこそまるでなにか悪事でもくわだてているように、胸をふるわせながら、エリーザは月夜の晩、そつとお庭へぬけだして、長い並木道なみきみちをとおって、さびしい通をいくつかぬけて、お寺の墓地へでていきました。すると、そのいちばん大きな墓石の上に、血を吸う女鬼のむれがすわっているのをみつけました。このいやらしい魔物どもは、水でもあびるしたくのように、ぼろぼろの着物をぬいでいました。やがて骨ばった指で、あたらしいお墓にながいつめをかけました。そうして餓鬼がきのように、死がいのまわりにあつまって、肉をちぎって食べました。エリーザはそのすぐそばをとおっていかなければなりません。

すると女鬼どもは、おそろしい目でにらみつけました。けれども心のなかでお祈しながら、エリーザは燃えるイラクサをあつめて、それをもってお城へかえりました。

このときただひとり、エリーザをみていたものがありました。それはれいの だいそうじょう 大僧正 でした。この坊さんは、ほかのひとたちのねむっているときに、ひとり目をさましているのです。そこで今夜のことをみとどけたうえは、いよいよじぶんのかんがえが正しかったとおもいました。こんなことはお妃きさきたるものすべきことではない。女はたしかに魔女だったのだ。だからああして王さまと人民を迷わしたのだと、かんがえました。

お寺の懺悔座ざんげざで、大僧正は王さまに、じぶんの見たことと、おもっていることを話しました。ひどいのろいのことばが、大僧正の口からはきだされると、お寺のなかの昔のお上しょうにん 人 たちの像が首をふりました。それがもし口をきいたら、「そうではないぞ、エリーザに罪はないのだぞ。」と、いいたいところでしたらう。けれども大僧正はそれを、まるでちがったいみにとりました。——あべこべに、それこそエリーザに罪のあるしように、で、その罪をにくめばこそ、あのとおり首をふっているのだとおもいました。そのとき、ふた粒まで大粒の涙が、王さまのほおをこぼれ落ちました。王さまは、はじめて、うたがいの心をもってお城にかえりました。どうして落ちついてねむるどころではありません。

はたしてエリーザがそつと起きあがるところをみつめました。それから毎晩、おなじことをしました。そのたびにそつと、あとをつけて行って、エリーザがれのほら穴のへやに姿をかくしてしまふところをみとどけました。

日一日と、王さまの顔はくらく、くらくになりました。エリーザはそれをみつけて、それがなぜかわけはわかりませんが、心配でなりませんでした。そのうえ、きょうだいたちのことを心のなかでおもつて苦しんでいました。エリーザのあつい涙は、お妃の着るびろうどとむらさきぎぬ紫絹の服のうえにながれて、ダイヤモンドのようにかがやいてみえました。そのりっぱなよそおいをみるものは、たれもお妃になりたいとうらやみました。そうこうするうちに、エリーザのしごともしつかあがつていきました。あとたつた一枚のくさりかたびらが出来かけのままにだけでした。一本のイラクサももうのこつていませんでした。そこでもういちど、行きおさめにお寺の墓地へ行って、ほんのひとつかみの草をぬいてこなければなりません。さすがにエリーザも、ひとりぼっちくらやみのなかをいくことと、あのおそろしい魔物に出あうことをかんがえると、心がおくれました。けれども神さまにたよる信心のかたいように、エリーザの決心はあくまでもかたいものでした。

エリーザはでかけていきました。ところで、王さまと大僧正もそのあとをつけて行きま

した。ふたりは、エリーザが格子門こうしもんをぬけて、墓地のなかへ消えていくところをみました。そばへ寄ってみますと、血を吸う魔物どもが、エリーザが見たとおりに墓石のうえにのつていました。王さまはそのなかまにエリーザがいるようにおもって、ぎよつとしました。ついその夕方までも、そのお妃がじぶんの胸にいたことをおもいだしたからです。

「さばきは人民にまかせよう。」と、王さまはいいました。そこで、人民は、「エリーザを火あぶりの刑に処する。」と、いう宣告を下しました。目のさめるようなりつばな王宮の広間から、くらい、じめじめした穴蔵のろうやへエリーザは押し込められました。風は鉄格子の窓からぴゅうぴゅう吹き込みました。今までのびろうどや絹のかわりに、エリーザのあつめたイラクサの束たばがほおりこまれました。その上にエリーザはあたまをのせることをゆるされました。エリーザの編んだ、かたいとげで燃えるようなくさりかたびらが、羽根ぶとんと夜着になりました。けれどエリーザにとって、それよりうれしいおくりものはありません。エリーザはまたしごとをつづけながらお祈をしました。そとでは、町の悪太郎どもが、わるくちの歌をうたっていました。たれひとりだつて、やさしいことばをかけるものはありませんでした。

ところが、夕方になって、鉄格子のちかくにはくちょうの羽ばたきがきこえました。こ

れはいちばん末のおにいさまでした。おにいさまはいもうとをみつ付けてくれました。いもうとはうれしまぎれに声をあげて、すすり泣きました。そのくせ、心のなかでは、もうほどなく夜になれば、この世のみおさめだとおもっていました。でも、しごとはもうひといきでしあがります。おにいさまたちはしかもそこへ来ているのです。

大僧正は王さまと約束して、おわりのときまで、エリーザのそばについていることにしました。それで、このときそばへ寄つて来て、そのことをいうと、エリーザは首をふつて、目つきと身ぶりとで、どうかでていってもらいたいとたのみました。今夜こそしごとをしあげてしまおう。それでなければせつかくいままにながしたなみだも、苦しみも、ねむらない夜を明かしたことも、みんなむだになつてしまうのです。大僧正はいじのわるい、のろいのことばをのこしてでていきました。でもエリーザはじぶんになんの罪もないことを知っていました。そこでかまわずしごとをつづけました。

ちいさなハツカネズミが、ちよろちよろゆかの上をかけまわつて、イラクサを足のところまでひいてきてくれました。エリーザのお手つだいをしてくれるつもりでした。すると、ツグミも窓の格子こうしの所にとまつて、ひとばんじゆう、一生けんめい、おもしろい歌をうたつて、気をおとさないようにとはげましてくれました。

まだそとは、夜明けまえのうすあかりでした。もう一時間たたなければ、お日さまはのぼらないでしょう。そのとき、十一人のきょうだいは、お城の門のところへ来て、王さまにお目どおりねがいたいとたのみました。けれどもまだ夜があげないのだから、そんなことはできないといわれました。王さまはねむっていらっしやる、それをおさまたげしてはならないのだということです。それでもきょうだいはたのんだり、おどかしたりしました。^{このえ}近衛の兵隊がでて来ました。いや、そのうちに王さままででておいでになって、どういわけかとおたずねになりました。するともう、きょうだいたちの姿はみえませんでした。ただ十一羽の野のはくちょうが、お城の上をとびかけて行きました。

人民たちがのこらず町の門にあつまつて来て、魔女の焼きころされるところをみようとひしめきあいました。よぼよぼのやせ馬が一頭、罪人のる馬車をひいてきました。やがてエリーザはそまつな麻の着物を着せられました。あのうつくしい髪の毛は、きれいな首筋にみだれたまま下がっていました。ほおは死人のように青ざめでいました。くちびるはかすかにうごいていました。そのくせ指はまだみどり色の麻をせっせと編んでいました。いよいよ死刑になりに行く道みちも、やりかたしごとをやめようとはしませんでした。十枚のくさりかたびらは足の下にありました。いま十一枚目をこしらえているところなの

です。人民たちはあつまつて来て、口ぐちにあざけりました。

「見ろ、魔法がなにかぶつぶついつている。さんびかの本ももっていやしない。どうして、まだいやな魔法をやっているのだ。あんなもの、ばらばらにひき裂いてしまえ。」

こういつて、みんなひしひしとそばへ寄つて来て、くさりかたびらを引き裂こうとしました。そのとき、十一羽の野のはくちようがさあつとまいおりました。馬車のうえにとまつて、エリーザをかこんで、つばさをばたばたやりました。すると群衆はおどろいてあとへ引きました。

「あれは天のおさとしだ。きつとあの女には罪はないのだ。」と、おおぜいのものがささやきました。けれど、たれもそれを大きな声ではつきりといいきるものはありませんでした。

そのとき、役人が来て、エリーザの手をおさえました。そこで、エリーザはあわてて、十一枚のくさりかたびらをはくちようたちのうえになげかけました。すると、すぐ十一人のりっぱな王子が、すつとそこに立ちました。けれどいちばん末のおにいさまだけは片手なくつて、そのかわりにはくちようの羽根をつけていました。それはくさりかたびらの片そでが足りなかつたからでした。もうひといきで、みんなでき上がらなかつたのです。

「さあ、もうものがいえます。」と、エリーザはいいました。「わたくしに罪はございません。」

すると、いま目の前におこった出来事を見た人民たちはとうといお上人さまのまえでするように、いつせいにうやうやしくあたまを下げました。けれどもエリーザは死んだもののようになって、おにいさまたちの腕にたおれかかりました。これまでの張りつめた心と、ながいあいだの苦しみが、ここでいちどにきいて来たのです。

「そうです。エリーザに罪はありません。」と、いちばんうえのおにいさまがいました。そこで、このおにいさまは、これまでであったことをのこらず話しました。話しているあいだに、なん百万というばらの花びらがいちどにおいだしたような香りが、ぶんぶん立ちました。仕置柱のまえにつきあげた火あぶりの薪に、一本一本根が生えて、枝がでて、花を咲かせたのでございます。そこには赤いばらの花をいっぱいつけた生垣が、高く大きくゆいまわされて、そのいちばんうえに、星のようにかがやく白い花が一りん吹いています。その花を王さまはつみとつて、エリーザの胸にのせました。するとエリーザはふと目をさまして、心のなかは平和と幸福とでいっぱいになりました。

そのとき、のこらずのお寺の鐘がひとりでに鳴りだしました。小鳥たちがたくさんかた

まっでとんで来ました。それから、それはどんな王さまもついみたこともないようなさかんなお祝の行列が、お城にむかつて練^ねつていきました。



青空文庫情報

底本：「新訳アンデルセン童話集第一巻」同和春秋社

1955（昭和30）年7月20日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

野のはくちょう

DE VILDE SVANER

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>